

清河八郎

# 「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査後半同行記

5

庄内町清川出身の幕末の志士・清河八郎は猿羽根峠について「最上川を見下ろし、月山や鳥海山をはるかに眺め、いちだんといふ景色である」「ここから望む鳥海山の形は富士山に似ている」と旅日記「西遊草」(東洋文庫)に書いた。「泥土の道だから雨降りの時は人も馬も難儀をする」との記述もある。

八郎が1855(安政2)年、母を連れて全国を旅した際の奥内ルートを検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」(矢口正武代表)戸沢村出身)の踏査隊は、村山市から尾花沢市名木沢を経て、舟形町との境にある猿羽根峠に向かった。

踏査当日はあいにくの強い風雨。四輪駆動車で国道13号猿羽根トンネルの南の毒沢から狭く曲がりくねった坂道に入った。2き余り進んだ先の駐車場で下車し、石段を上って頂上付近を散策。上部の「徒是(これより)北」が欠けて「新荘領」だけが残る新荘藩境石標を確認した。羽州街道の面影を残す付近の道からは、最上川の雄大な流れを見下ろすことができた。

「西遊草」によると、猿羽

猿羽根峠—清水—清川

## 旧道から最上川の絶景



切り通しになった旧舟形街道を歩く踏査メンバー＝大蔵村

根峠を過ぎた八郎親子は羽州と手向宿(鶴岡市羽黒町)を街道から舟形街道に入り、長結ぶ街道。江戸時代、清水か者原(舟形町)を経て清水(大下流は陸路もあったが最上川舟運が主で、河港の清水はの海藤嘉右衛門家に泊まった八郎は「わが家に帰ったも同然」と、すっかり安心して集めて酒宴を開き、八郎たちが清水から最上川を下る舟にも同乗した。

舟形街道は羽州街道舟形宿

清水の集落近くの奥道沿いに旧街道の入り口を示す標柱が立ち、車も走れる砂利道の脇に昔の街道が通っている。しばらく行くと道沿いに最上川の絶景を見渡せる展望台があり、あすまやも整備されている。その先の下り坂は道が掘り下げて傾斜を緩めており「昔の人が荷車を通すため切り通しにした」と熊谷さん。集落に入ると道分右に「右ひじおり 左ふながた」と刻まれている。

熊谷さんによると、海藤嘉右衛門家は庄内藩の定宿で脇本陣の役割を果たし、士分として帯刀を許された。親類とあって清河八郎の清川の生家との付き合いも深く、八郎の父は清水で俳諧の会を催したという。

海藤家は今はビルに変わった。道の向かい側は本陣だった小酒屋造(小庵和也)氏。同社を訪ねると、庄内藩主や家臣らを迎えた古い宿札が掲げられていた。小屋家には諸大名が宿泊し、幕末から明治にかけては黒田清隆、大久保利通も泊まった。

清水で舟に乗った八郎らの一行は、本合海(新庄市)、吉口(戸沢村)を経て仙人堂で清川からの迎いの舟に乗り換えた。踏査隊は悪天候のため予定していた舟下りを断念したが、八郎が「下り舟が最も難儀する」と書いた清水近くの「天狗(てんぐ)の巻」と評した「白糸の滝」を土手や対岸から眺め、清川でゴールした。

「元気・まちネット」は清河八郎が学者を目指して家出し、江戸へ向かった奥内ルートを「回天の道」と名付け、2009、10年に踏査した。「西遊草の道」をたどって八郎がますます好きになった」と矢口さん。踏査隊員の佐野千晶「まちネット」理事は「山形には良いものがたくさんある。歴史など視点を決めることでさらに魅力が高まると思う」と話した。(文)鶴岡支社・伊藤哲哉、写真)同・色摩高幸

おわり

山形新聞  
2012年11月28日  
に掲載!